“学びをひろげる わたしと〇人の会”第 16 回研究会（2016.6.25）まとめ

岡中 克史さん（三重県在住　中学校美術教員）提案　“森のアトリエ”

“森のアトリエ”のホームページにはこう紹介されています。「インクルーシブなみんなの居場所として、ART を起点に運営をしたいと日々実践です。いろいろな生きにくさの横に寄り添って、生き直しの場所としてありたいのが、私たちの願いです。美術・音楽・ダンス・文章などなど、多様な表現活動のサポートを、伊賀の森のアトリエでしています(^_^) よろしければ、どうぞおこしくださいね。」

岡中さんから伺ったお話を報告しようと思うのですが、いざ書き始めてみるとなかなか難しいことに気づきました。それほど大きな実践であり、岡中さんの生き方と重なっているような気がするからだと思います。

“森のアトリエ”とは、「居場所」なんですね。それは「出会いの場」、「交流の場」、そして「通過点」でもあります。一度来た人たちが再び、何度も訪れる「再会の場」でもあります。

資料によれば、

「2002 年 5 月、阿山町にオープンしました。森に囲まれ、岩瀬川が流れる自然いっぱいの環境の中で、みなさんの『やってみたいなにか』のサポートができればと、施設を無料で開放しています。」とあります。

アトリエには、１．造形スペース　２．スタジオスペース　３．子ども図書館があり、

活動は、①ART ON たまごクラブ：長期の休みに、障害のある子どもたちが同世代の仲間と一緒に、表現活動や自然の中での遊びなど、人との関わりの中から自分のしてみたいことを実現するプログラムと、障害のある子を持つ保護者同士の交流を深める場づくりを行うプログラムを実施。

②ART ON：高齢者や障害者、子どもたちが集まって、自由に創作活動を行う。

③若者たちによるバンドの練習と、ライブの演奏会。

④子どもたちが自由に来て、読書する子ども図書館。

ということになるでしょうか。

「“ゆー”は不登校・摂食障害さらに長引く精神のアンバランスを癒しに時々アトリエを訪れていましたが、『たまごクラブ（長期休業中の主に障害のある子のサポート事業）』のボランティアから常連メンバーとなり、今では大学に合格し積極的に人生を生きようとしています。最近の彼女の楽しいおしゃべりや、相手を大切にする気持ちにあふれるようすは ART ON（創作活動の名称）の心地よさをかもし出してくれます。その前向きさは“だい”と組んでアトリエのない日にも集まろうと、みんなを誘ってカラオケ大会まで企画してしまうところまできました。」（岡中さん）

読んでいると、アトリエの活動に参加した子どもたちが、回を重ねながら主体的に参加するようになり、中にはやがてスタッフとして活動するメンバーとなっていく人たちもあることが分かってきます。

“森のアトリエ”が、出会いと関わりを大切にする場ですが、1回の関わりではなく、何回も何年も繰り返して訪れ、参加する人たちの歴史が交錯・交流する場ともなっていることが想像されます。

中でも私（松森）が特に興味を持ったのは、“森のアトリエ”が岡中さんの住まいにもなっているということです。ある日、敷地内でイノシシが死んでいるの発見し、急きょ職場に連絡して時間休をとり、イノシシを処分して学校に向かったという話を披露されました。

伊賀の森に囲まれた草原に一軒建っている“森のアトリエ”。岡中さんは、そこに住まいして、静寂の空気を吸い、風の音を聞き、生き物の気配を感じる、そのような暮らしをしながら、訪れる高齢者や、障害者、子どもたち、バンドの若者たちと、地続きで関わっておられます。中学校で教師として教育活動に取り組まれています。

自分自身を振り返ってみると、私が「居場所」をつくるならば、「アトリエ」というような発想ではなく「がっこう」という発想（反・学校というものになるかもしれませんが、いずれにせよ「学校」にこだわって）になるだろうなと思いました。しかも私の暮らしの場と地続きにならないように、自宅とは別の場所につくるだろうなと思いました。個人の生活と「教育」の仕事の間に距離をとっておきたいと思うからです。全身全霊をかける誠実さが、とても岡中さんのようにはゆきません。

岡中さんの実践は、私にとっては宮沢賢治を髣髴とさせます。